

Inschriften der Mongolei 三冊の中に收めたる諸種の金石文をいひ、回鶻碑文とは Orkhon 河域の Kara Balgasun の廢墟に存せる回鶻可汗の紀功碑を指す、此等の碑文に用ゐられたる突厥文字なるものが、芬蘭・露西亞を初め歐洲諸國の學者によりて熱心に研究せられ、一八九四年に至りて初めて Thomsen 氏の讀解する所となり、同年の Copenhagen の學士院の報告に Déchiffrement des Inscriptions de l'Orkhon et de l'Jenissei なる一篇の公やけにせらるゝや、此の知識を基として東洋學者の此等の金石文の研究に従事するもの相踵ぎ、一九一四年彼得堡の Самойлович 氏が Материалы для указателя литературы по Енисейско-орхонской письменности としてこれに關する大小研究論文及び報告等の題目著者を羅列せるものゝみにても、實に二百八十七篇の多きに達せるは、如何に此の新史料が學者の注意を喚起することの深かりしかを知るに足るべし、就中碑の突厥文の翻譯者としては Radloff, Thomsen, Bang 氏等重んぜられ Gabelentz, Wassilief, Deveria Schlegel 氏等及び我が白鳥博士は、各々突厥若くは回鶻碑の漢文の解釋を公にせり、以上の諸氏の外、此等の碑文と既存の史料との上に立ちて、當時の漠北の史上に出色の研究を試みたる者としては、主として Hirth, Marquart の二氏を推すべし、此等諸氏の論述する所は、各々好く微細に入り大綱を捉へ、後の學者をして據らしむるに足るものありと雖、然も惜むべきは此等の歐洲東洋學者の中には、漢文に通ぜざる人多く、また漢文に通ずるものはアルタイ語に熟せざるもの多きことにして、之が爲に前者が漢史料を用ゐるに當りては、主として Julien 氏の譯出せる圖書集成の邊裔典、若しくは Deguignes, Bitschurin 氏等の書^②に依據するの外無く、後者が突厥文を引用するに當りても、各々見解を異にせる碑文譯者の何れに適從すべきかを知らざる有様なりしを以て、論議往々にして正鶻を得ず、また意見區々たるを免れざりしなり、